

滋賀学区の歴史

1. 古代・中世

弥生時代前期には集落がすでに形成されており、南滋賀遺跡や大津遺跡では多数の異物が出土しています。

古墳時代には、近江では最も古いとされる皇子山巨大古墳が作られ現在もその姿をとどめています。また、福王子古墳群、大伴古墳群、宇佐山古墳群、山田古墳群など多数の古墳群がありまじかで見ることができます。

667年には、天智天皇により大津の宮が現在の錦織に建設されました。大津の宮は壬申の乱により4年で廃墟となり現在は大津宮跡を残すのみです。南滋賀町廃寺跡や、この寺の瓦を焼いた榎の木原遺跡などがあります。

9世紀後半、平安時代には、当地の豪族であり歌人としても有名な大伴(友)黒主がみずからの氏寺を円珍に寄進、円珍が園城寺としました。

1065年に源頼義（河内源治2代目棟梁）が九州の宇佐神宮を勧請し錦織の宇佐山に宇佐八幡宮を建立、例年9月に行われる例祭は950年の伝統があります。

戦国時代に入ると、滋賀はしばしば戦場となります。織田信長は、宇佐山に城（宇佐山城）を築き浅井、朝倉軍との防衛戦や比叡山焼き討ちを行っています。現在も宇佐山城の石垣が残っています。

2. 近世から現代

豊臣政権から徳川政権にかけて、滋賀は山門領（延暦寺）から園城寺領になりました。明治に入り、廃藩置県により大津県、滋賀県と変遷し明治22年に市町村制が施行され、南滋賀村ほか5か村が合併し滋賀村となり、昭和7年に大津市に合併し現在にいたっています。



皇子山巨大古墳



榎の木原遺跡



南滋賀町廃寺跡



宇佐山城石垣跡